

モノコードを用いた定常波の観測

[実験テーマの概要]

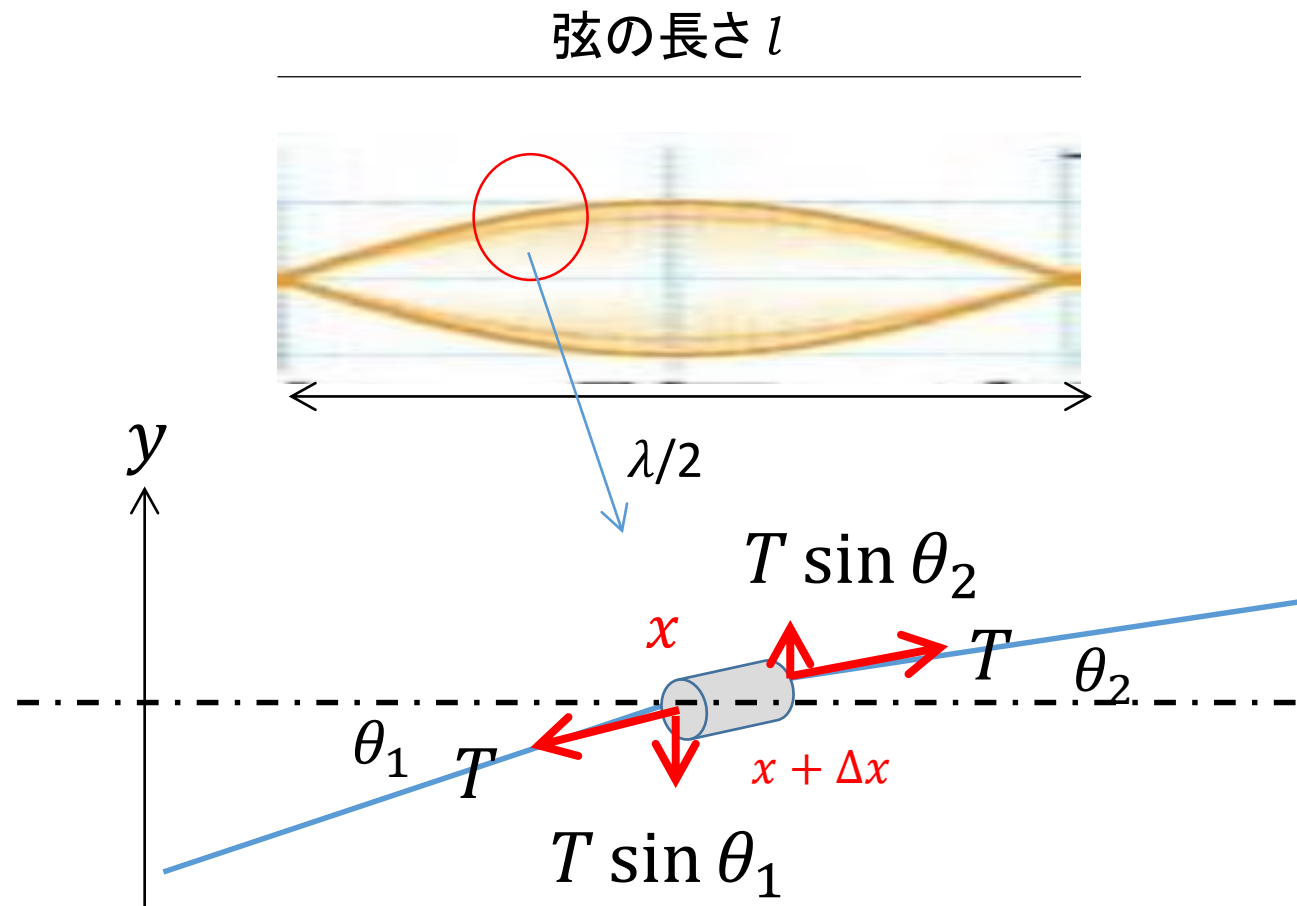
金属線に発生させた定常波の性質を理解する

張力 T で張られた線密度 σ の弦に定常波が観測された。弦の運動を考えるために、質量 Δm の微小部分に注目する。

この部分の両端(位置 x と $x+\Delta x$)には張力が作用しており、上下に運動する。垂直な向きの運動方程式 $ma=F$ は次のように書ける。

$$\begin{aligned} \Delta m \frac{\partial^2 y}{\partial t^2} &= T \sin \theta_2 - T \sin \theta_1 \\ &= T \tan \theta_2 - T \tan \theta_1 \\ &= T \frac{\Delta y(x+\Delta x)}{\Delta x} - T \frac{\Delta y(x)}{\Delta x} \end{aligned}$$

ここで θ が微小なので、 $\sin \theta = \tan \theta$ を用いた。また、 $\frac{\Delta y(x+\Delta x)}{\Delta x}$ は $x + \Delta x$ での傾き、 $\frac{\Delta y(x)}{\Delta x}$ は x での傾きを表す。



$$\Delta m \frac{\partial^2 y}{\partial t^2} = T \frac{\Delta y(x + \Delta x)}{\Delta x} - T \frac{\Delta y(x)}{\Delta x}$$

ここで、 $\frac{\Delta y(x+\Delta x)}{\Delta x}$ は $x + \Delta x$ での傾き、 $\frac{\Delta y(x)}{\Delta x}$ は x での傾きのため微小量で、その差は、 $a(x + \Delta x) - a(x) = \frac{da}{dx} \Delta x$ と書けるので、(くわしくは、間接測定の不確かさをもう一度見ること)

$$T \frac{\Delta y(x + \Delta x)}{\Delta x} - T \frac{\Delta y(x)}{\Delta x} = T \frac{\partial^2 y}{\partial x^2} \Delta x$$

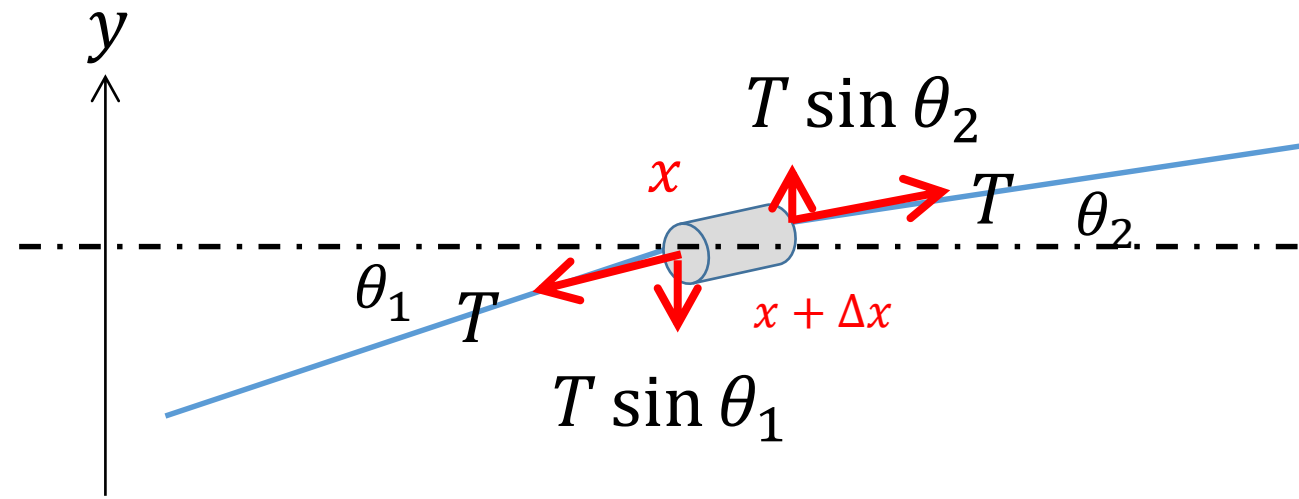
$$\Delta m \frac{\partial^2 y}{\partial t^2} = T \frac{\partial^2 y}{\partial x^2} \Delta x$$

が求まった。更に、

$$\frac{\partial^2 y}{\partial t^2} - T \frac{\Delta x}{\Delta m} \frac{\partial^2 y}{\partial x^2} = 0$$

$$\frac{\partial^2 y}{\partial t^2} - \frac{T}{\sigma} \frac{\partial^2 y}{\partial x^2} = 0$$

となる。この式を波動方程式と呼ぶ



波の式は $y = A \sin(kx - \omega t)$ なので、波動方程式に代入すると、

$$\omega^2 - \frac{T}{\sigma} k^2 = 0$$

$$\frac{\omega}{k} = \sqrt{\frac{T}{\sigma}}$$

となり、

$$v = \sqrt{\frac{T}{\sigma}}$$

波の進行速度が張力と線密度で決まる。

弦に定常波が現れる条件

波の進行速度が張力と線密度(実験条件)で決まることがわかった。

$$v = \sqrt{\frac{T}{\sigma}}$$

一方、振動数 f と波長 λ の関係は $v = f\lambda$ だったが、両端を固定された弦に定常波が生じる条件は、

$$\lambda = \frac{2l}{n}$$

だったので、

$$f = \frac{n}{2l} \sqrt{\frac{T}{\sigma}}$$

となり、定常波を発生させられる振動数が決まっていることがわかる。

